

分科会③

「支援技術（AT）の今とこれから －活用の実際と制度を考える－」

コーディネーター | 大前勝利（京都大学学生総合支援機構附属ディスアビリティ・インクルージョンセンター）

話題提供者 | 山口俊光（新潟大学）
渡辺崇史（日本福祉大学工学部）

要旨

高等教育機関での授業形態が多様化していくなか、障害のある学生の教育や学び、そして合理的配慮の選択肢の一つとしてAT（支援技術）の活用が注目されています。

一方で、ATに関する情報が少ないなどの背景から導入や運用がハードルになることも少なくありません。

本分科会では、障害のある学生の学びを支えるATの「活用の実際」と「制度的課題」に関して国際的な視点を交えて議論を深めます。京都大学高等教育アクセシビリティプラットフォーム（HEAP）における支援技術活用の取り組みや、昨年実施した米国「Assistive Technology Industry Association (ATIA) 2025」視察プロジェクトをはじめとした、登壇者それぞれの立場から国内外での実践や普及活動について話題提供を行います。後半のトークセッションではフロアの皆さんとATの今後について考える機会とします。

コーディネーターによる当日の様子や感想等

本分科会では、国内外の最新のAT活用事例と、その普及・定着に向けた課題について、幅広く議論しました。多くの方々にご参加いただき、支援技術分野への高い関心が寄せられていることを強く感じました。

国際カンファレンス（ATIA）の報告では、AIが教育現場に導入される中で、AIの利用を「合理的配慮」として位置づけ、適切な使い方を検討する必要性を確認しました。また、デジタル支援技術（DAT）に関する専門家の不足が米国でも課題になっていることが報告されました。

さらに日本の高等教育機関や地域のICTサポートセンターにおけるATフィッティングの具体的な実践を紹介し、支援においては、テクノロジーありきではなく、環境調整や時間をかけた丁寧な聞き取り（アセスメント）の「態度」が不可欠である点を再確認しました。学生のニーズを把握し、リソースとして個別最適化されたATを提供するためには、

大学等においてATに関する知識に精通した職員の配置と、専門職として活躍できる人材の育成やポストの整備を同時に進めていくことが必要であるとの展望を共有しました。